

中高での学生の履修状況を考慮した大学の球技授業のあり方に関する研究

新 名 謙 二

1. はじめに

1991年の大学設置基準の大綱化により、科目区分が廃止され、カリキュラムの構成において個々の大学の裁量が大きく認められることとなった。それまで「保健体育科目」の必修科目として位置づけられていた「体育実技」も大きな変化を受けることになった。多くの大学で科目名の変更が行われ、それまで2年間の必修であったものが短縮あるいは廃止された。本学でも必修科目としての「スポーツ健康実習」と選択科目の「生涯スポーツ」に分けて開講されることとなり、前者は1年間(2単位)の必修に短縮された。従来「体育実技」と称されていた身体活動を伴う実技科目は必ずしも開講しなくても良くなったわけであるが、本学では新入生の体力水準が低いことと教職の取得に必要な科目であること¹などを考慮し、全学的な議論を経た上で1年次の必修は維持されている。本稿では身体活動を伴う実技科目が必要であることを前提として論を進めていくこととする。

コア科目「スポーツ健康実習」は学生が自身の健康の維持・増進を現在及び将来にわたって実現していくための重要な科目であるが、その効果を上げるためには学生が積極的に取り組むような授業内容であるべきである。言い方を換えれば、楽しく体を動かすことができることが重要であり、それを実現するために教材として球技が用いられることが多い。球技では自分の身体以外にボールや打具(バットやラケットなど)を操作する必要があり、種目に特有の技術が必要とされる。また、多くの球技種目ではチームとして競い合う形式となっており、個人の技能以外にチームとしての戦術もゲームを行う上で必要とされる。したがって、球技種目を楽しむためには一定の技能と経験が必要であり、それらが不十分な学生に対しては授業の中で適切な指導を行っていくことが求められる。

大学という高等教育機関での授業であることを考慮すると、学生に対して単に「楽しく身体を動かす」場を提供するだけでは不十分である。身体に関する科学的知見やスポーツ文化に対する理解を深められるような授業が実現できて初めて、大学で行う価値があるものなるだろう。本学においても履修ガイドには「運動やスポーツを通じて健康や体力の維持増進を図り、あわせて自己の身体への理解と関心を深めることを目的とします。」(p.40)と記載されている²。また、スポーツ文化については後期の授業で取り上げることになっており、シラバスの主題と目標に「講義では運動やスポーツの文化的側面について理解する。」と記載されている³。これらの内容については中学校あるいは高等学校の保健体育の授業である程度学んでいることになっている。しかしながら、保健体育は受験科目でないため、学生が学習したことを実際に身につけているかどうかは明らかでない。それ以前に、学校によって保健体育の授業の取り扱いに大きな差があることが推測される。受験科目以外を軽視すること以外にも施設面の制約から学習指導要領に示されている球技種目の一部を実施していない学校が少なからず存在することが推測される。したがっ

て、学生が中学校及び高等学校で受けてきた授業経験について把握しておくことが「スポーツ健康実習」の授業内容を良いものとするにつなげるものと考えられる。

授業経験に加えて、種目に対する学生の希望を把握しておくことも重要である。自分がやってみたいと思う種目を選択できれば、授業に取り組む意欲が上がるのが考えられる。また、1つの種目だけに取り組みたいのか、複数の種目に取り組みたいのかについても、本学ではこれまで明示的な調査が行われてこなかった。開講する側の都合だけで種目や実施形態を決定するのでは、学生のニーズに適合した授業を提供できず、結果として授業の効果を十分に上げることができないであろう。

以上のことから、本研究では学生の中学校及び高等学校での球技種目の履修状況について調査し、合わせて大学での授業に対する希望を調査することにより、「スポーツ健康実習」における球技授業のあり方について検討することを目的とする。

小学校、中学校、高等学校までの保健体育の授業については体育科教育学分野を中心に膨大な研究があるが、大学の授業を対象としてそのあり方について検討した研究は少ない。羽田他（2017）は学生が高等学校時代に経験した実技種目について調査し、バレーボール、バスケットボールで実施率が高いことを報告している。また、女子は「基本練習中心」男子は「試合中心」の傾向があり、特にソフトボールとサッカーで顕著であることも明らかにしている。さらに、学生が技術の上達があったと感じた種目はバレーボールで、基礎練習を充分やっている種目であることも報告している。この研究は本研究と問題意識を同じくして実施されたものであるが、スポーツ科学科に在籍する学生を対象として行われたものであるため、体育やスポーツへの関心が高い集団に対しての調査であることを考慮する必要がある。

大学での授業内容に関する研究としては黒岩他（2017）によるアクティブ・ラーニングの実践的研究や小野寺と松本（2016）によるチーム固定効果について検討した研究があるが、いずれも教職を目指した専門科目の授業についての研究であり、「スポーツ健康実習」の授業とは目標に違いがあると考えられる。

体育やスポーツを専門としない一般学生を対象とした研究としては、井上（2013）があり、テニス実技授業において半期15回の授業における指導法を、受講生が提出したレポートをもとに検討している。ビデオ撮影によるフォーム矯正の有効性や生涯スポーツへの発展を考えたグループ作りへの配慮の必要性を報告しており、各グループの到達目標を達した設定と段階的指導が重要であると指摘している。ただし、高校までの授業学習についての記述はない。

2. 方法

学生の中学・高校時代の授業での経験と、大学の授業に対する希望を明らかにするために質問紙調査を実施した。調査は1年生対象の必修科目である「スポーツ健康実習」の後期最終授業時（2018年1月22日、23日、25日）に教室で実施した。この科目は実技科目であるが、簡単な講義と授業評価に関するアンケート調査及び体力テスト結果のマークシートへの転記などを行う関係で、最終回は教室で実施する計画になっていた。授業の一環として質問紙調査を行うに当たり、本学の「人文科学研究の倫理審査委員会」に倫理審査の申請を行い、承認された。調査対象学生は1年生の全員であったが、大雪のために1月22日の7・8限で授業が休講になったため、最終的に履修登録者497名から欠席者28名と休講時間帯登録者68名を除いた401名に質問紙を配布した。調査は集合調査法の形式で行い、授業時間中に内容について説明を行った後、授業終了後に用意した回収箱に学生が質問紙を直接入れる形で回収した。回収された質問紙のうち、表紙にある「上記の説明を理解した上で調査に協力することに同意します。」という記載のチェッ

クリストにチェックのなかったものが存在したため、これらの質問紙は除外した。最終的な有効回収数は364件となり、回収率は90.8%であった。

質問紙に取り上げる球技種目を選定するに当たり、中学校・高等学校の学習指導要領解説書に記載されている種目と、「スポーツ健康実習」で実施される可能性の高い種目を基準とし、「バスケットボール」、「サッカー」、「バレーボール」、「卓球」、「バドミントン」、「ソフトボール」の6種目を選定した。

質問項目は、(1)中学校・高校における球技関連の授業に関する項目、(2)大学の「スポーツ健康実習」に関連する項目、(3)学生個人に関する項目（出身学校種別と所属学部）、から構成されている。

(1)については、上述の6種目それぞれに対して、①実施の有無、②楽しさについて、③生徒に考えさせる授業が行われていたかどうか、④ルールの説明が丁寧に行われていたかどうか、⑤ゲームの実施の有無、の5項目を選択式で尋ねた。(2)については、授業形態（多種目型と単一種目型のどちらがよいか）、「多種目型」の授業で実施してほしい種目、「単一種目型」の授業で実施してほしい種目を尋ねた。また、6種目のそれぞれに対して、①授業内でルールの説明を丁寧に行ってほしいかどうか、②授業内で技術や戦術についての説明を詳しく行ってほしいかどうか、③授業内で歴史や背景についての説明を詳しく行ってほしいかどうか、④ゲーム中心の授業である方がよいと思うかどうか、⑤練習方法や試合形式などの内容を学生が主体的に決める授業である方がよいかどうか、の5項目を4件法（大いにそう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、全くそう思わない）で尋ねた。

分析は単純集計とクロス集計を行い、種目間の相違やクロス集計表の分析においては有意水準を5%としたカイ2乗検定を行った。その際に、度数が5以下のセルが生じた場合には項目を統合し、2×2の分割表の検定ではイエーツの補正にもとづいて検定を行った⁴。検定における統計量の算出にはR(Ver.3.2.0)⁵を用いた。

3. 結果

図1～図17に単純集計結果を示す。以下にその概要について説明する。

(1) 中学生時の授業について（図1～図5）

実施率ではバスケットボールとバレーボールで高く、90%以上の学生が「実施された」と回答していた。楽しさについてはバドミントンや卓球で「楽しかった」と回答された割合が高かったが、「やや楽しかった」も含めると全ての種目で70%以上の学生が楽しかったと回答していた。生徒に考えさせる授業はバレー

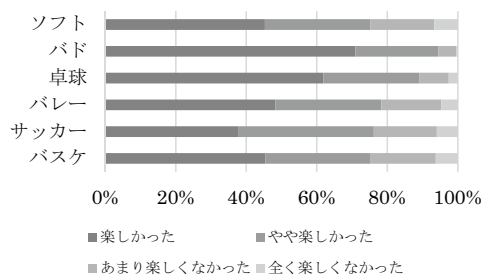
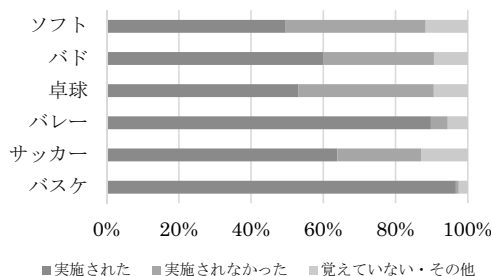


図1 中学生時の実施の有無について（有意差あり） 図2 中学生時の楽しさについて（有意差あり）

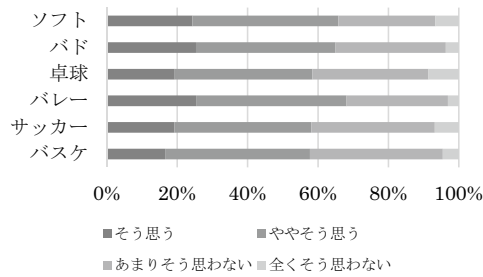


図3 中学生時の生徒に考えさせる授業が行われていたかどうかについて (有意差あり)

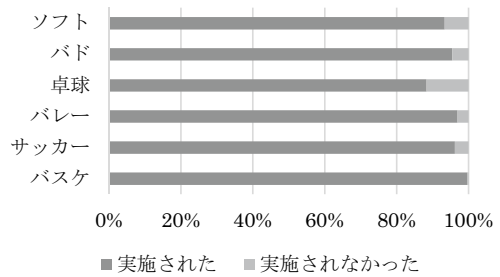
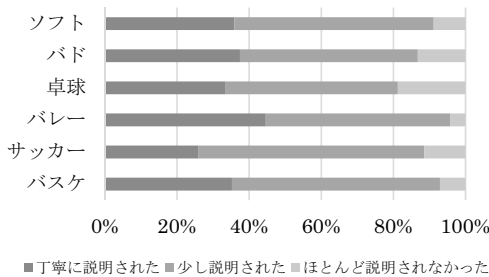


図4 中学生時のルールの説明について (有意差あり) 図5 中学生時のゲームの実施について (検定せず)

ボール、バドミントン、ソフトボールで「そう思う」、「ややそう思う」と回答した学生の割合が高かった。ルールの説明ではサッカーで「丁寧に説明された」と回答した学生の割合が低かった。ゲームの実施率は全ての種目で高く、最も低かった卓球でも90%近くの学生が「実施された」と回答していた。

(2) 高校時の授業について (図6～図10)

実施率はバレーボールとバスケットボールで高く、ソフトボールとサッカーでは低かった。楽しさについてはバドミントンで「楽しかった」と回答された割合が高く、全ての種目で「やや楽しかった」も含めると80%以上の学生が楽しかったと回答していた。生徒に考えさせる授業の割合は、種目間に差はなく、70%程度の学生が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。ルールの説明については、バスケットボール、サッカー、卓球で「丁寧に説明された」と回答された割合が低かったが、「少し説明された」まで含めると、最も低い卓球でも80%以上の学生が説明されたと回答していた。ゲームの実施率は中学時と同様

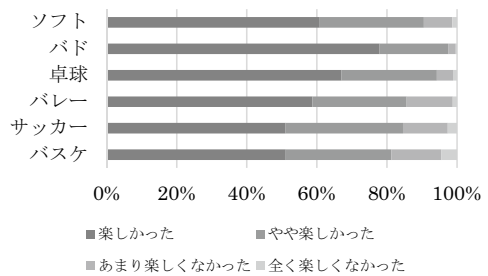
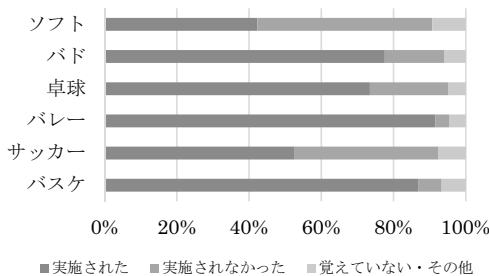


図6 高校生時の実施の有無について (有意差あり) 図7 高校生時の楽しさについて (有意差あり)

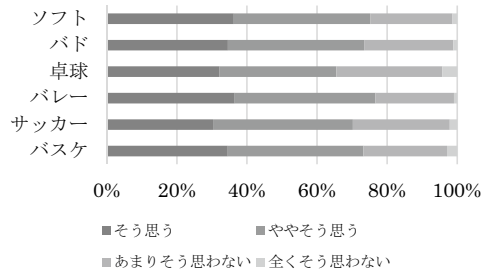


図8 高校生時の生徒に考えさせる授業が行われていたかどうかについて

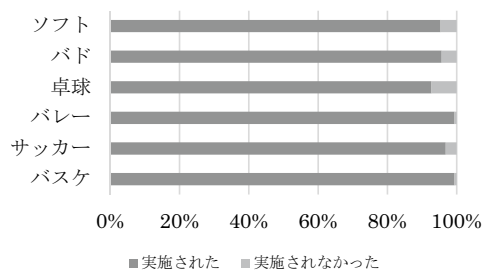
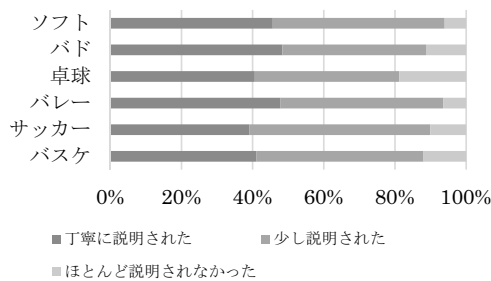


図9 高校生時のルールの説明について (有意差あり) 図10 高校生時のゲームの実施について (検定せず)

に全ての種目で高く、90%以上の学生が「実施された」と回答していた。

(3) 大学での授業に対する希望について (図11~図17)

授業形態の希望については、「多種目型がよい」が最も多く半数近くの学生が希望していた。次いで約3分の1の学生が「実施種目によって異なる」と回答していた。種目の希望としては多種目、単一種目のどちらもバドミントンの希望が多かった。ソフトボールとサッカーは単一種目、多種目のどちらも低かった。

授業内容に関しては「ルールについての説明を丁寧にやってほしい」と「ゲーム中心の授業である方がよい」の2項目で種目間に違いが見られた。ソフトボールとサッカーで、「ルールについての説明を丁寧にやってほしい」に対しては「大いにそう思う」という回答の割合が高く、「ゲーム中心の授業である方

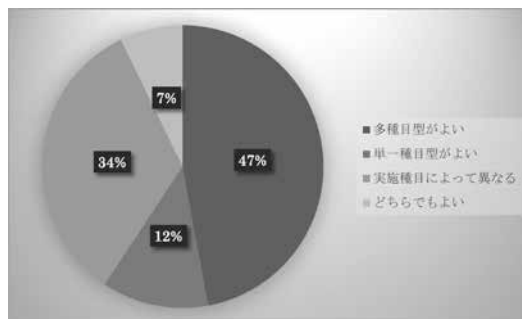


図11 大学での授業形態の希望について

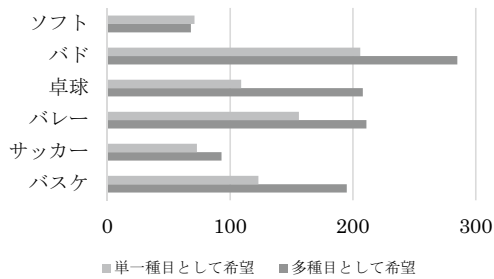


図12 実施種目に対する希望

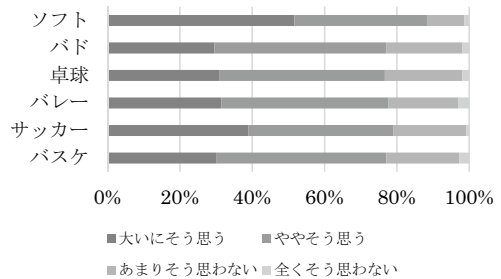


図13 ルールの説明を丁寧に行ってほしい

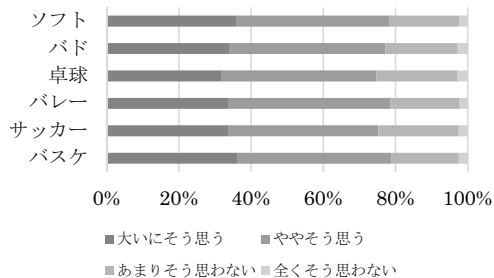


図14 技術や戦術についての説明を丁寧に行ってほしい

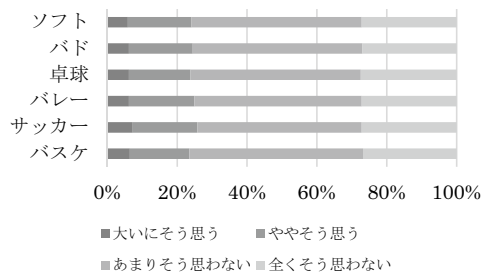


図15 歴史や背景についての説明を詳しく行ってほしい

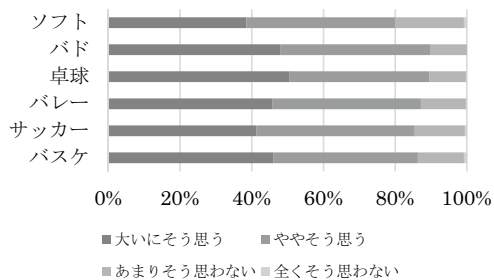


図16 ゲーム中心の授業である方がよい

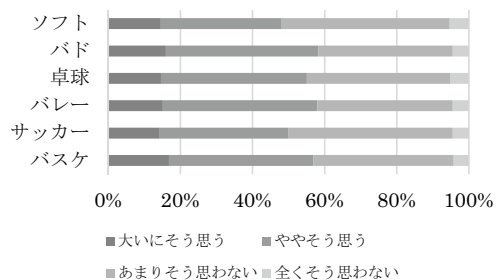


図17 練習方法や試合形式などの内容を学生が主体的に決める方がよい

がよい」については、「大いにそう思う」という回答の割合が低かった。「歴史や背景についての説明を詳しく行ってほしい」という項目では肯定的な回答の割合が低かった。

(4) クロス集計の結果

① 学校種別と実施率 (図18)

「実施されなかった」との回答が少なかったバスケットボールとバレーボールを除いた4種目について、出身学校の種別(公立か私立か)と実施率についてクロス集計を行った。中学時のサッカーとソフトボール、高校時のサッカーとバドミントンにおいては、私立学校の実施率が有意に低かった。

表1 出身中学校・高校について

	公立	私立	その他
出身中学校	263	88	7
出身高校	240	107	11

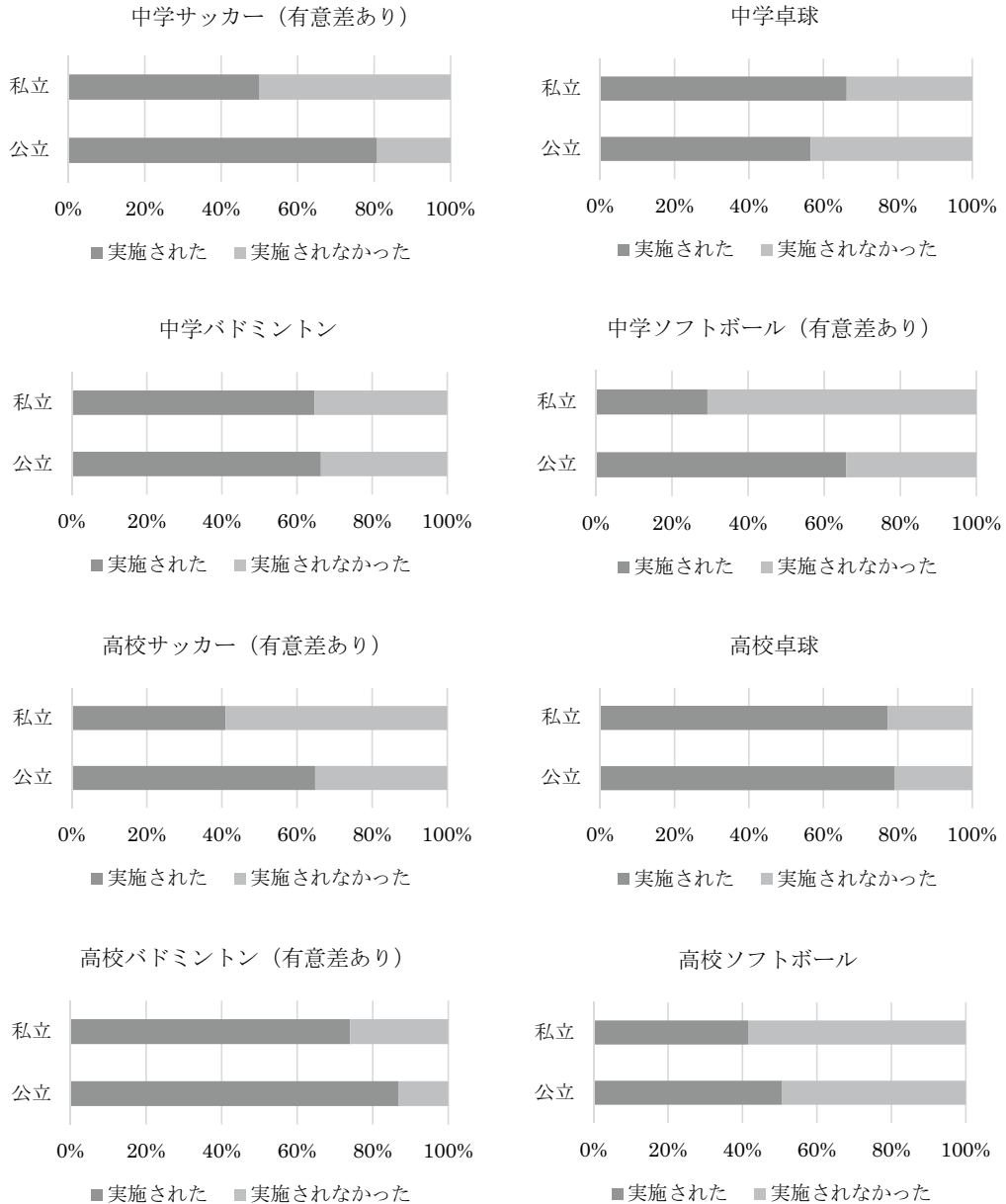


図18 出身学校種別実施状況

② 多種目でバドミントン希望者の他種目希望動向 (表2)

「多種目型」の実施種目として最も希望の多かったバドミントンについて、他の種目の希望状況をクロ

ス集計によって算出した。バレーボールと卓球を希望している学生が60%おり、バスケットボール希望者も55%いた。サッカーとソフトボールの希望者は少なかった。

表2 多種目バドミントン希望者の他種目希望動向

希望種目	人数	割合
バスケット	157	55.1%
サッカー	68	23.9%
バレーボール	171	60.0%
卓球	176	61.8%
ソフトボール	52	18.2%

③ 中高での種目経験と多種目での希望動向（図19）

「多種目型」の実施種目として希望の少なかったサッカーとソフトボールについて、中学・高校時の授業経験とのクロス集計を行った。いずれの集計表も5%水準で有意差があり、授業経験がある（「実施された」と回答）方が、多種目型としてその種目を希望する割合が高くなっていった。この傾向は特に高校時のソフトボールで顕著であった。

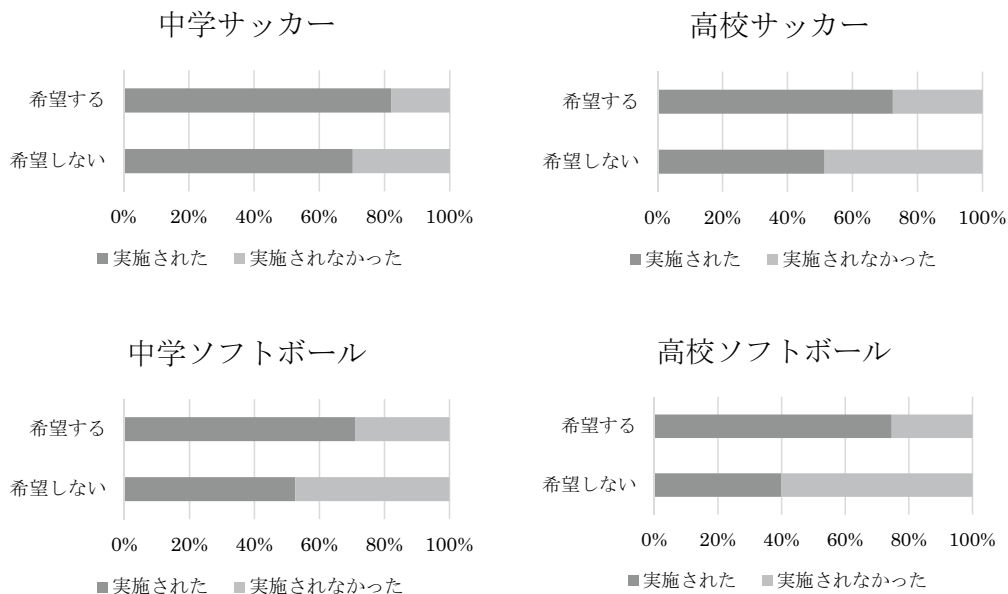


図19 中学・高校時代の授業経験と多種目としての希望動向（すべて有意差あり）

4. 考察

バスケットボールとバレーボールにおいて実施率が高かったことは、羽田他（2017）の結果と一致している。クロス集計の結果から、種目ごとの実施率の違いは、学校種別の実施率の違いを反映していることが明らかになった。特に私立中学校のソフトボールでは「実施された」と回答した学生は3割にとどまっている。中学校の学習指導要領では球技を「ア. ゴール型」「イ. ネット型」「ウ. ベースボール型」の3つに分類し、「第1学年及び第2学年においては、アからウまでをすべての生徒に履修させること。」と記載されている（pp.80-81）。一方で「ウについては、ソフトボールを適宜取り上げることとし、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができること⁶。なお、ウの実施に当たり、十分な広さの運動場の確保が難しい場合は指導方法を工夫して行うこと。」と記載されている（p.81）。このことから、十分な広さのグラウンドを持たない私立中学ではソフトボールが取り扱われなかったものと推測される。理由はともあれ、サッカーやソフトボールに関しては、中高生の間に種目にあまり親しんでいない学生が少なからず存在することが明らかになった。特にソフトボールの場合には、テレビなどでの試合の中継も少なく、競技自体を目にする機会が少ない。大学の授業で教材として取り上げる際にはこのことに充分留意する必要がある。

大学での授業内容に関する意向では、多くの学生がゲーム中心の授業であることを希望し、ルールや技術・戦術については丁寧な説明を希望している一方で、種目の歴史や背景についての説明はあまり望んでいないことが明らかになった。ルールについては中学・高校時にある程度説明されていることが調査結果に示されているが、学生は十分に身につけていない、あるいは不十分であったと認識していることがうかがえる。授業の実施形態としては多種目型に対する希望が多かった。実施種目としてはバドミントンに対する希望が多い一方で、サッカーやソフトボールなどの屋外種目に対しては多種目型の実施種目としても希望は少ない。これらの意向を授業計画に反映させていくことが必要であるが、その際に以下の2点を考慮しなければならない。1点目は大学の授業科目「スポーツ健康実習」の目的に合致しているかどうかについて、2点目は施設の制約についてである。

「スポーツ健康実習」では授業を通じて健康の維持・増進を図ると共に、特に後期の授業ではスポーツ文化に対する関心を高め、理解を深めることも目標としている。種目の歴史や背景についての説明があまり望まれていなくても、授業内容からこれらの説明をなくすることは授業の目的に合致しない。ただし、授業内での取り上げ方についてはルールの説明とも関連させて、学生の興味関心を喚起させるような工夫が必要であろう。例えば、なぜそのようなルールが作られたかを歴史的背景と共に説明することなどが考えられる。

施設の制約については、履修人数の多い時間帯ではどうしてもグラウンドやテニスコートなどの屋外施設を使用する種目を含めなければならないという点がある。質問紙調査から明らかのように、屋外種目を希望している学生はあまり多くない。クロス集計の結果からは、過去に屋外種目の授業経験がある方が、その種目を希望する割合が高くなっているという傾向が明らかになった。この結果に基づけば、当初は屋外種目を希望していない学生であっても、授業経験を重ねることによってその種目に慣れ、最終的にその種目が好きになることも期待される。そのような結果を生じさせるためには何よりも授業を充実させることが重要である。例えばニュースポーツ⁷などの導入により、屋外であっても学生が履修したくなるような種目構成にすることも一案である。また、学期の途中で屋内と屋外を交代することができないか検討することも必要であろう。

以上のことから、現時点で本学の「スポーツ健康実習」で球技の授業を取り上げる際には、以下の点に留意することが必要であると考えられる。

- ・取り上げる種目は単一ではなく複数の種目が良い。ルールや技術・戦術についてある程度丁寧に説明することを考慮すると、1つの時間帯で取り上げる種目はバドミントンを含んだ屋内競技から2～3種目（1種目当たり4～6回）が適当である。
- ・各種目の歴史や背景についての説明は、ルールの説明や技術の変化などと関連付けて少しずつ行う方がよい。
- ・やむを得ず屋外種目を取り上げる際には、種目についての説明を丁寧に言い、学生がその種目に親しむことを心がけるべきである。ニュースポーツ等の導入や実施場所のローテーションなどにより、少しでも学生の履修意欲を高める工夫を検討することも必要である。

今回の調査では中学・高校時の授業経験と比較することに重点を置いたため、テニスやニュースポーツに関する学生の希望は調査していない。授業で開講したことのない種目も含めて、範囲を広げて希望種目の調査を行い、授業計画に役立てていくことは今後の課題である。また、本研究における調査対象は本学学生のみとなっているので、その結果を大学における球技授業一般に適用することには限界がある。公益社団法人全国大学体育連合が会員大学12校を対象に実施した調査⁸によれば、女子学生が履修したい種目として1位にバドミントン（42.1%）、2位にバレーボール（33.7%）が挙げられている。本研究とは調査方法が異なるため単純に比較はできないが、希望種目に関しては共通した傾向があることがうかがえる。本研究の結果が女子学生一般に適用できるかについてはさらなる研究の蓄積が必要であるが、本研究がその一助となることを期待する。

文献

- 羽田 聡・鈴木 明・進藤 周治・松永 直人（2017）高等学校の体育実技球技種目の実施状況とその成果に関する調査研究。大東文化大学教職課程センター紀要、第2号、pp.165-170。
- 井上 洋一（2013）テニス実技における指導方法の検討－生涯スポーツを目指して－。奈良女子大学スポーツ科学研究、第15号、pp.73-77。
- 黒岩 一雄、伊藤 宏、大矢 隆二、木宮 敬信（2017）球技ゴール型スポーツにおけるアクティブ・ラーニングの実践的研究－学生の主体性を意識した授業展開に着目して－。常葉大学教育学部紀要、第38号、pp.271-281。
- 文部科学省（2010）中学校学習指導要領（平成20年3月、平成22年11月一部改正）。
- 小野寺 恵介、松本 真（2016）大学生の授業におけるチーム固定による効果について－球技・バスケットボールの事例より－。埼玉大学紀要、65(1)：25-35。

注

- 1 教育職員免許法施行規則には「免許法別表第一備考第四号に規定する文部科学省令で定める科目の単位は、日本国憲法二単位、体育二単位、外国語コミュニケーション二単位及び情報機器の操作二単位とする。」（第66条の6）と定められており、教員免許状を学生に取得させることができるようにするためには、体育と認定される内容を備えた科目を開講することが必要になっている。本学では「スポーツ健康実習」が教育職員免許法での「体育」に相当する科目として認定されている。

- 2 お茶の水女子大学 (2018) 履修ガイド 2018 平成30年.
http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index2018_d/fil/2017ug2_gaiyou.pdf
- 3 軽運動クラスを除くスポーツ健康実習全ての開講クラスで共通に記載されている。一例として月曜5・6限のアドレスは下記の通りである。http://tw.ao.ocha.ac.jp/ochatimetable/index_kamoku.cfm?jugyo=18A0804
- 4 ゲームの実施についての項目では、「実施されなかった」の度数が少ない種目があり、回答も2項目のため結合すると分割表にならなくなることから検定は行わなかった。
- 5 R Core Team (2015). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <http://www.R-project.org/>.
- 6 文末の「こと」は不要であると考えられるが、原文通り引用した。
- 7 平成8年度の教育白書に下記の様に説明されている。「グラウンド・ゴルフ、インディアカなど、近年、我が国で行われるようになった比較的新しいスポーツ種目の総称で、1) 力の限界に挑戦するのではなく、触れ合いと楽しみを追求する 2) 体力、技術、性別、年齢に左右されず、だれとでもできる 3) ルールに弾力性があり、対象、環境、時間による変更が可能であるなどの特徴を持っている。市町村で開発したもの、海外から紹介されたものなどを含めると100種を超えるニュースポーツがあるとされている。」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199601/hpad199601_2_196.html)
- 8 『体育・スポーツ・健康科目の履修に関する意識調査結果ダイジェスト』2017年7月18日
(<http://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/b3b05ac90b0ffc8cad3d9d0999f5d50a.pdf>)